

第6章 学校

第1節 家庭と学校の役割分担

第2節 学校への満足度

第3節 今年度の学校のようにすや新学習指導要領

Benesse 教育研究開発センター研究員 朝永 昌孝



序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

資料編

第1節 家庭と学校の役割分担

「授業中騒いだり、立ち歩いたりしないこと」を、学校ではなく家庭の役割と考える母親が1998年の25.7%から2011年の52.0%になるなど、しつけや教育を家庭の役割ととらえる母親が増加。また、全体的に家庭の役割だとみなされるしつけや教育の項目が多い。

子どものしつけや教育は、学校に通う小・中学生にとって、家庭と学校の双方でなされる部分があわさって成立している。では、母親としては、さまざまな内容のしつけや教育について、それらの役割の担い手を家庭だととらえているのだろうか、あるいは学校だととらえているのだろうか。

そこで「お子様のしつけや教育について、『家庭と学校のお互いの役割分担』をどのように考えていますか」という質問で、しつけや教育の役割分担に関する認識をたずねた。回答は「どちらかという和家庭が教育する」「どちらかという和学校が教育する」「あえて教育しなくてよい」の3択である。

しつけや教育を家庭の役割ととらえる 母親が増加

図6-1-1は、1998年と2011年について、経年比較が可能な小3～中3生の母親の回答結果を示したものである（この質問は、2002年と2007年にはたずねていない）。もっとも顕著な変化がみられたのは、「授業中騒いだり、立ち歩いたりしないこと」である。「どちらかという和家庭が教育する」との回答が、1998年の25.7%から2011年には52.0%へと倍増し、家庭の役割であるとの比率が過半数を超えた。

また、「友だちとのつきあい方」についても、「家庭」という回答が61.5%（1998年）から71.7%（2011年）へと、およそ10ポ

イント増加している。このように、しつけや教育について家庭の役割だと考える母親が増加していることがわかる。

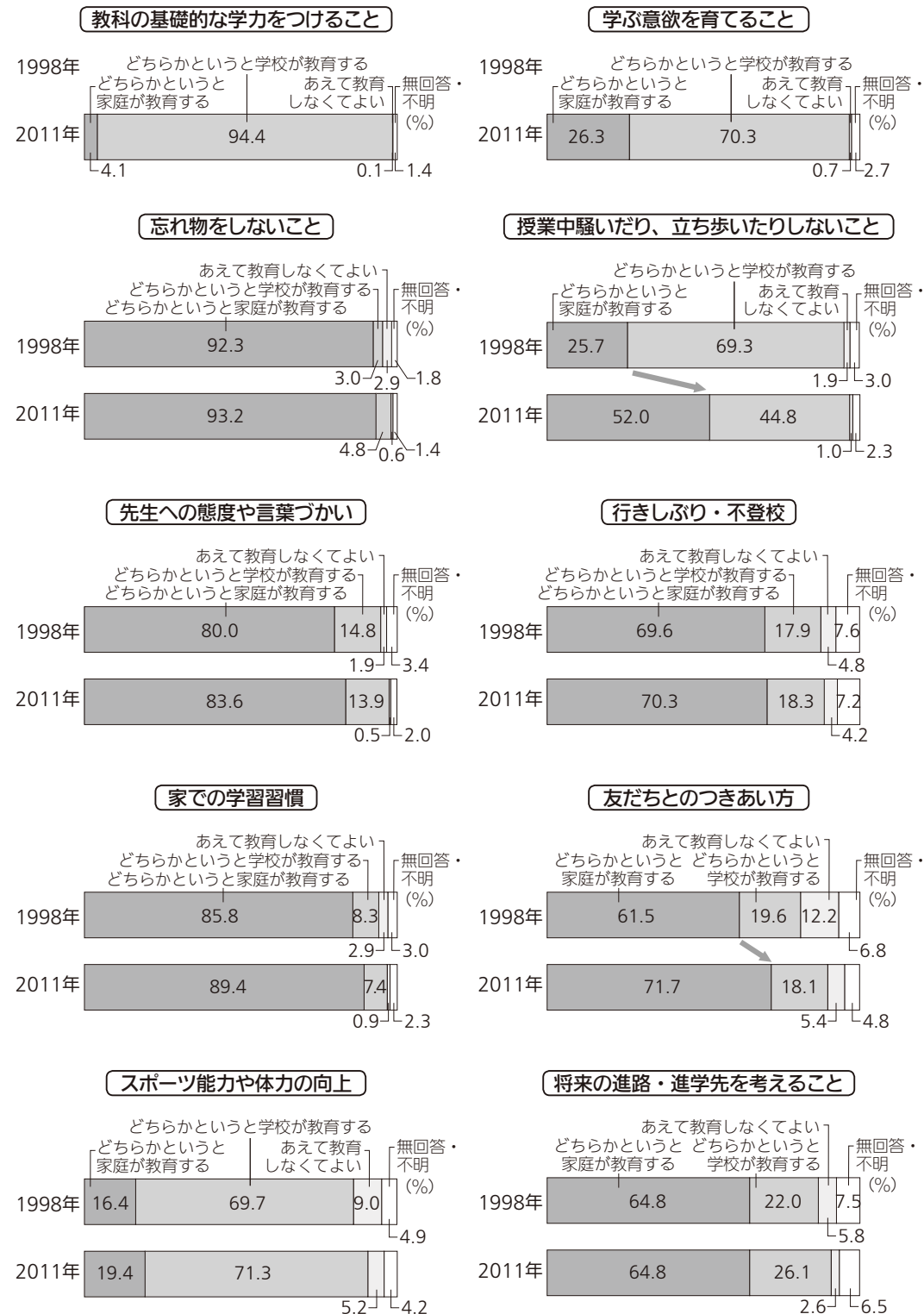
全体的に家庭の役割だとみなされる しつけや教育の項目が多数

さらに、経年変化はあまりみられない項目も含め、全体を通して、家庭の役割だという回答の比率のほうが高い項目が多い。たとえば「忘れ物をしないこと」「家での学習習慣」「先生への態度や言葉づかい」では、「どちらかという和家庭が教育する」との回答が8～9割にのぼっている。反対に「どちらかという和学校が教育する」という回答の比率のほうが高いのは、「教科の基礎的な学力をつけること」（94.4%）、「スポーツ能力や体力の向上」（71.3%）、「学ぶ意欲を育てること」（70.3%）の3項目である（いずれも2011年の数値）。

世間では、家庭は学校に対して多くのことを求めている、ということがいわれることがある。そのため、母親たちは多くの項目について学校の役割だと考えている、という結果が出ることも予想された。しかし、ここでの結果をみる限りそのようなことはなく、むしろ家庭の役割だととらえられている項目が多いことがわかる。

ただし、「どちらかという和家庭が教育する」ということの解釈は多義的でありうる。むしろ、回答者である母親自身が、自分の

図6-1-1 家庭と学校の役割分担（経年比較）



注1) 小3～中3生の数値。

注2) この質問は、2002年・2007年にはたずねていない。また、「教科の基礎的な学力をつけること」「学ぶ意欲を育てること」は、1998年にはたずねていない。

注3) サンプル数は、1998年4,475人、2011年6,020人。

家庭において担うべき役割だと考えているということは大いにあるだろう。その一方で、他の保護者や家庭のようすをみて、自分というより一般的に、学校ではなく家庭が担うべき役割だと考えていることもありうる。ただしずれであるにせよ、学校との対比において、さまざまなしつけや教育の内容が家庭の役割だととらえられていることは興味深い結果といえるだろう。

.....
**小・中学生の母親とも「基礎的な学力」は
 学校の役割、「忘れ物をしないこと」は
 家庭の役割と認識**

次に、しつけや教育の役割分担に関する認識について、2011年の結果を学校段階別にみたものが、図6-1-2である。

はじめに、小学生（小1～小6生）の母親と中学生（中1～中3生）の母親とでほとんど違いがみられなかったものをみると、「教科の基礎的な学力をつけること」「学ぶ意欲を育てること」「忘れ物をしないこと」「先生への態度や言葉づかい」「行きしぶり・不登校」があげられる。

たとえば、「教科の基礎的な学力をつけること」は小・中学生とも9割が「学校」、「忘れ物をしないこと」は小・中学生とも9割が「家庭」である。これらの項目については、家庭と学校の役割分担に関する母親の認識は、子どもの学校段階によらず一定である。

.....
**「将来の進路・進学先を考えること」は
 小→中で家庭の役割との認識が減少**

これに対して、学校段階によって違いがみられたものもある。まず、小学生の母親

のほうが中学生の母親より「どちらかという家庭が教育する」の比率が高かったのは、「家での学習習慣」（小学生93.6%>中学生86.4%）、「将来の進路・進学先を考えること」（小学生70.4%>中学生60.1%）、「スポーツ能力や体力の向上」（小学生26.4%>中学生13.8%）である。

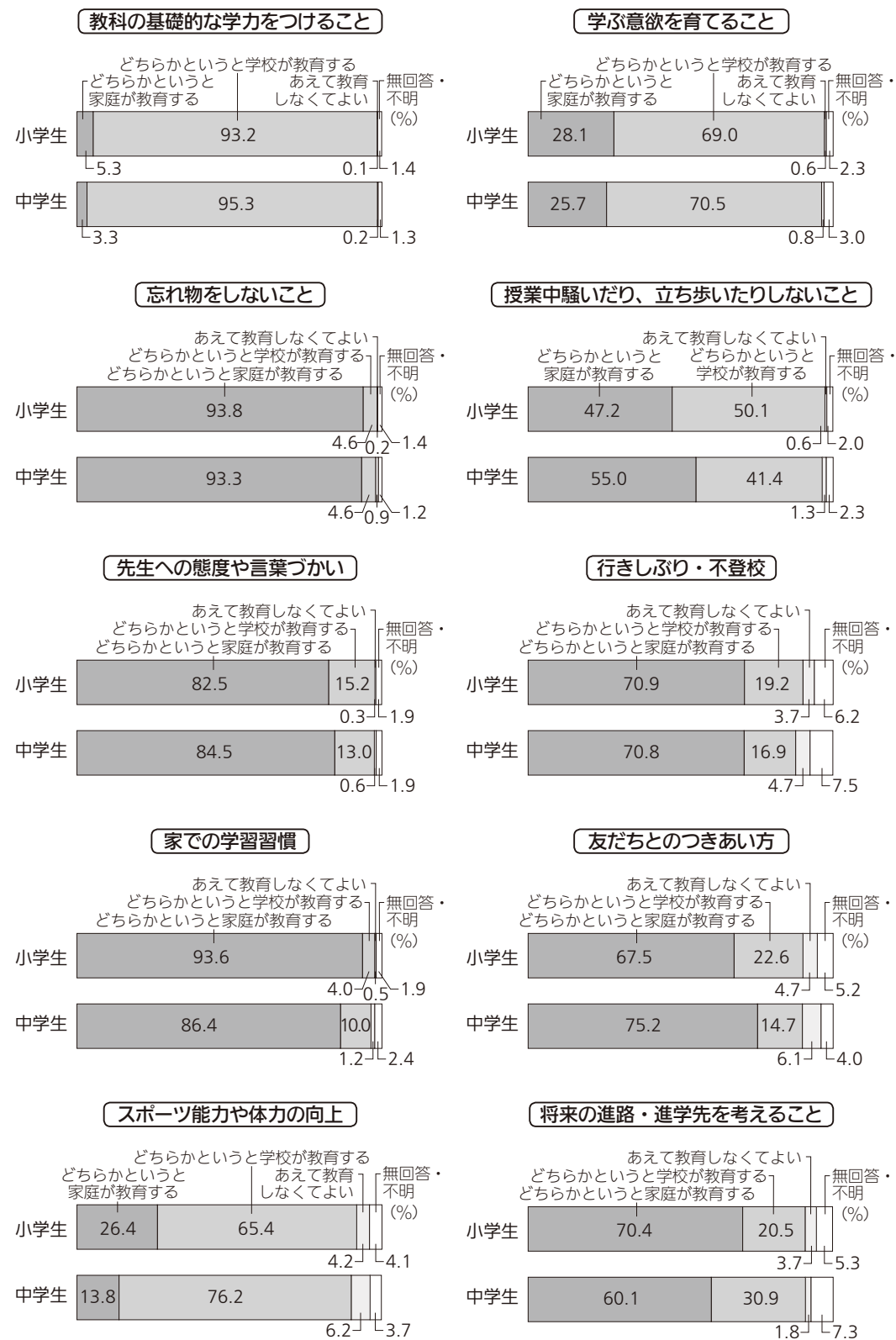
これらの項目は、学校段階があがると、家庭の役割であるとの認識が低くなる。いかえれば、中学生になると、学校の役割だととらえられる側面が相対的に強まっていく。こうした結果からみると、これらの内容は、母親の中学校への期待が大きい役割の一つ、という見方ができるかもしれない。

.....
**「友だちとのつきあい方」は
 小→中で家庭の役割との認識が増加**

一方、中学生の母親のほうが小学生の母親より「どちらかという家庭が教育する」の比率が高かったのは、「友だちとのつきあい方」（小学生67.5%<中学生75.2%）、「授業中騒いんだり、立ち歩いたりしないこと」（小学生47.2%<中学生55.0%）である。

これらの項目は、学校段階があがると、家庭の役割であるとの認識が高くなり、中学生になると、学校の役割だととらえられる側面が相対的に弱まっていく。友だちづきあいや授業中の立ち歩きという、基本的なレベルのしつけや教育は、小学校までは学校に期待する役割の一つであったとしても、中学校にまで期待することではなく、家庭で何とか対処すべきことであるという意識が反映されているのかもしれない。

図6-1-2 家庭と学校の役割分担（学校段階別）



注) サンプル数は、小学生4,191人、中学生3,186人。

第2節 学校への満足度

「教科の基礎的な学力をつけること」が2007年の66.4%から2011年には72.6%に、総合的な満足度も74.0%から79.1%になるなど、全体的に母親の学校に対する満足度は経年で上昇している。

日々、子どもたちが多くの時間を過ごす学校。母親は学校に対してどのような認識をもっているのだろうか。本節では、さまざまな学校の指導や取り組みへの満足度、ならびに総合的な満足度についてみていく。

はじめに、図6-2-1で「次のような学校の取り組みや指導について、どのくらい満足していますか」として、14項目について満足度をたずねた結果を示す。数値は「かなり満足している」+「まあ満足している」の比率で、小1～中3生の母親の回答である。

「生活面のしつけや指導」など、 学校への満足度が高い項目が多数

まず、2011年の数値をとりあげる。全体の傾向として、大半の項目で6割以上が「満足している」と回答しており、満足度は高い。もっとも高いのは「生活面のしつけや指導」(82.8%)で、次いで「学校の教育方針や教育活動の様子を保護者に伝えること」(77.2%)、「行事や委員会活動、部活動・クラブ活動などを十分行うこと」(73.4%)、「教科の基礎的な学力をつけること」(72.6%)などと続く。学習指導や生活指導、課外活動、保護者とのコミュニケーションなど、満足度が高い項目は多岐にわたる。また、2011年の調査では、新しい時代に求められる力として、新たに「相手に自分の考えを伝える力をつけること」「具体的な場面で知識を

活用する力をつけること」という項目についてもたずねた。これらの満足度は6割程度だった。

一方、満足度が半数を下回り低かったのは、「コンピュータを活用する力をつけること」(49.4%)、「中学受験・高校受験に役立つ学力をつけること」(39.0%)、「英語の力をつけること」(34.7%)である。学校のこうした取り組みには母親の評価が分かれるようである。

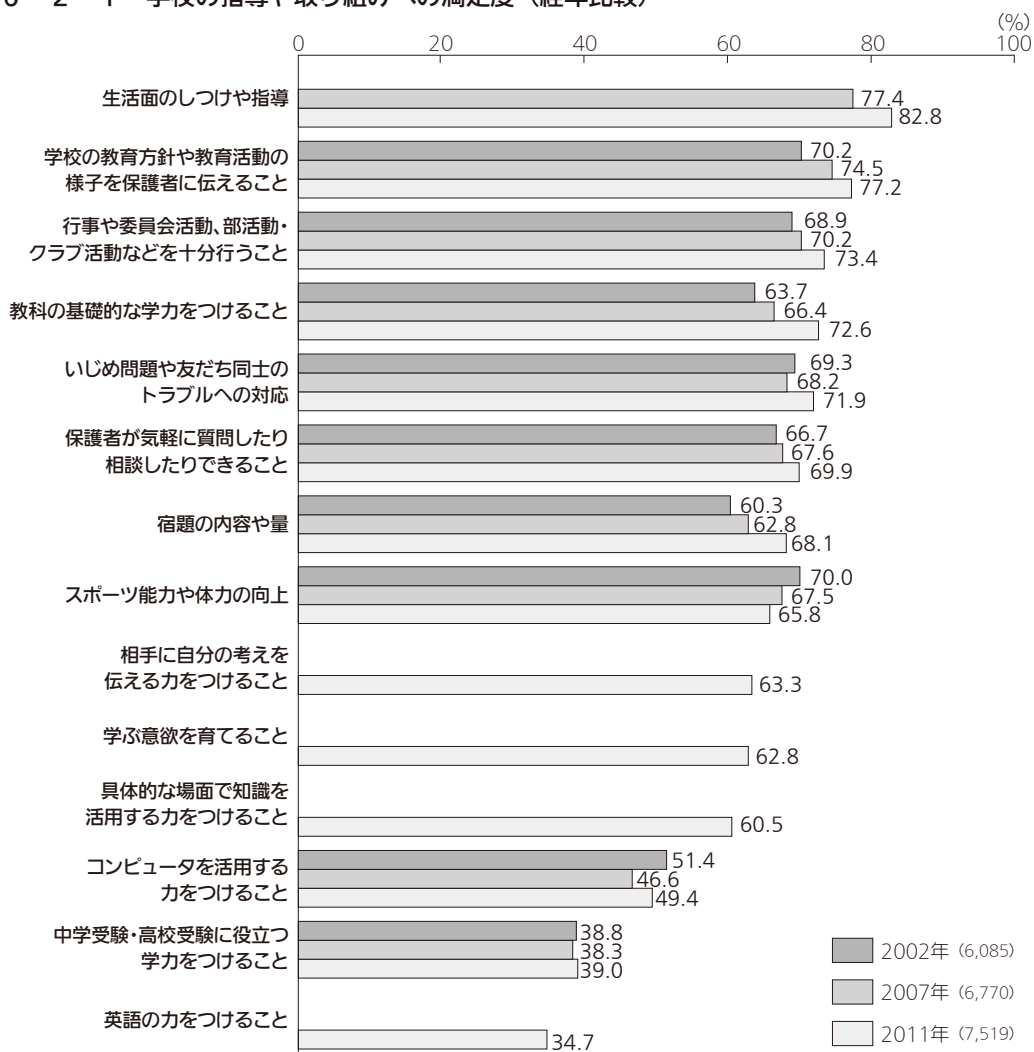
学校への満足度は経年で上昇

再び、図6-2-1から、経年変化をみてみよう。2007年に比べて、2011年で5ポイント以上増加したのは、「生活面のしつけや指導」(2007年77.4%→2011年82.8%)、「教科の基礎的な学力をつけること」(2007年66.4%→2011年72.6%)、「宿題の内容や量」(2007年62.8%→2011年68.1%)である。さらに2002年と比較すれば、「学校の教育方針や教育活動の様子を保護者に伝えること」も5ポイント以上増加しており、満足度は上昇傾向にある。

こうした傾向は、学校の指導や取り組みへの総合的な満足度をたずねた図6-2-2でも同様である。「かなり満足している」+「まあ満足している」の比率は、2007年の74.0%から2011年には79.1%へと、5.1ポイント増加している。

満足度の全体的な高さと経年での上昇に

図6-2-1 学校の指導や取り組みへの満足度（経年比較）

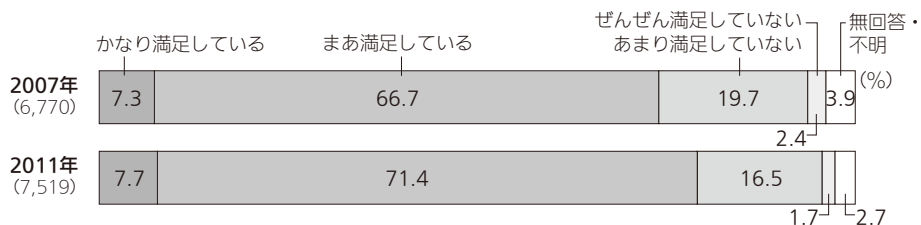


注1) 「かなり満足している」+「まあ満足している」の%。

注2) 「生活面のしつけや指導」は、2002年はたずねていない。「相手に自分の考えを伝える力をつけること」「学ぶ意欲を育てること」「具体的な場面で知識を活用する力をつけること」「英語の力をつけること」は、2002年・2007年はたずねていない。

注3) ()内はサンプル数。

図6-2-2 学校の指導や取り組みへの総合満足度（経年比較）



注) ()内はサンプル数。

は、いくつかの解釈が考えられる。まず実際の学校の取り組みを知り、満足とする可能性である。その一方、学校への要求水準自体を下げている、満足と回答している可能性も考えられる。ただ、いずれにしても、学校への満足度には一定の高さがあり、経年でみると満足している母親は増加しているといえよう。

.....
小学生の母親のほうが、中学生の母親より、学校の学習指導に満足
.....

次に、学校の指導や取り組みへの満足度について、学校段階別に示したものが、**図6-2-3**である。

小学生の母親のほうが、中学生の母親よりも、「満足している」比率が5ポイント以上高かったのは、「教科の基礎的な学力をつけること」「保護者が気軽に質問したり相談したりできること」「宿題の内容や量」「相手に自分の考えを伝える力をつけること」「学ぶ意欲を育てること」「具体的な場面で知識を活用する力をつけること」である。

こうしてみると、小学生の母親のほうが学校一すなわち小学校一に対して、基礎から応用、学習意欲の育成といった学習指導について相対的に満足感をもっており、学校とのコミュニケーションもとりにやすいと感じている、といった姿が浮かびあがってくる。

.....
中学生の母親のほうが、学校の「行事や委員会活動、部活動・クラブ活動」などに満足
.....

一方、中学生の母親のほうが、小学生の母親よりも「満足している」比率が5ポイント以上高かったのは、「行事や委員会活動、部活動・クラブ活動などを十分行うこと」「スポーツ能力や体力の向上」「中学受験・高校

受験に役立つ学力をつけること」「英語の力をつけること」である。

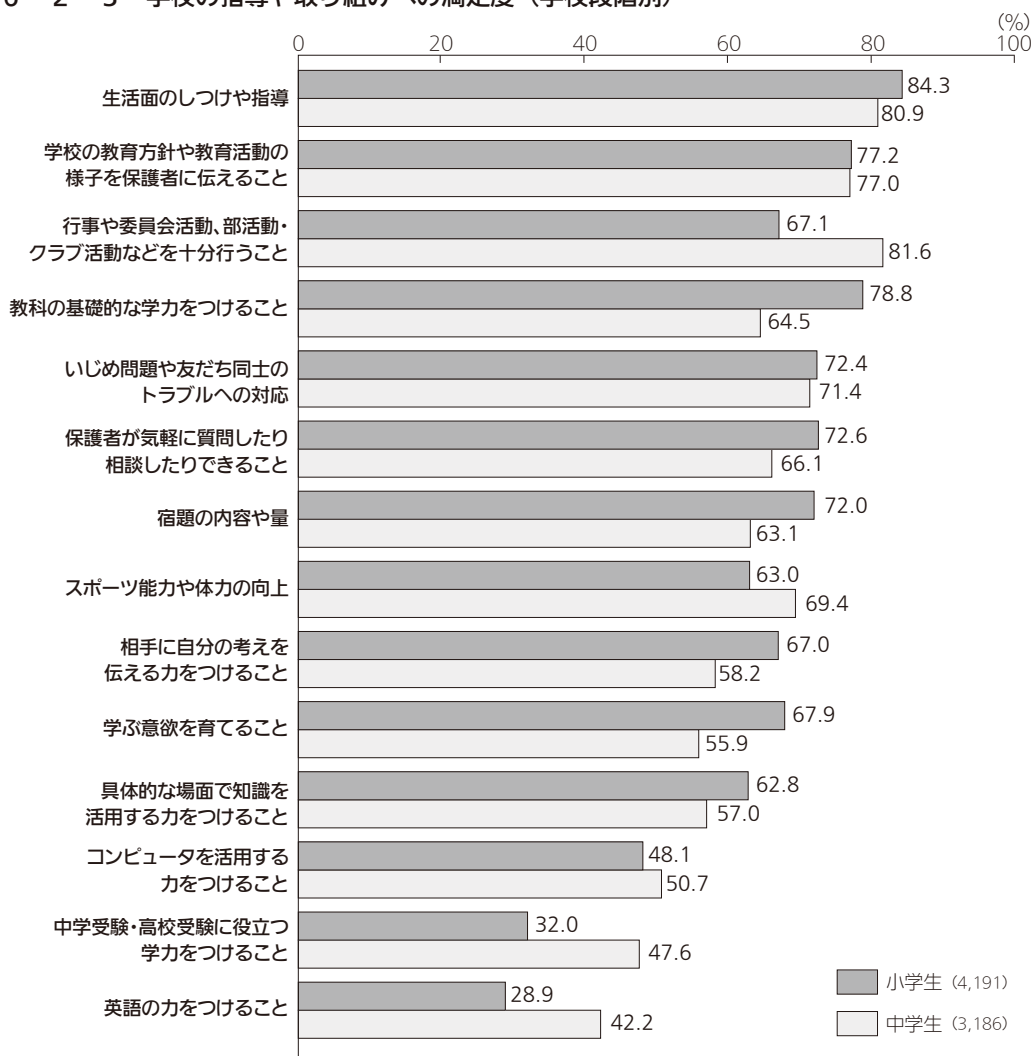
この結果からは、中学生の母親が学校一すなわち中学校一に期待し、満足している内容が浮かびあがっているように思われる。「行事や委員会活動、部活動・クラブ活動などを十分行うこと」という選択肢への回答からまず想起されるのは、中学校における部活動の重要性ではないだろうか。そして次に「中学受験・高校受験に役立つ学力をつけること」である。「満足している」母親の比率はおおよそ半数だが、それでも小学生の母親よりは多い。ここから想起されるのは、大半の子どもが経験することになる高校受験の存在であろう。さらに、「英語の力をつけること」である。現在、小学校でも外国語活動が始まったとはいえ、依然、中学校のほうが、教科として「外国語（英語）」が大きな位置を占めているからだろう。ただし、「満足している」母親の比率は、42.2%にとどまり、絶対値として高いわけではない点には留意が必要である。

.....
小学生の母親のほうが、中学生の母親より、学校への総合的満足度は高い
.....

最後に、**図6-2-4**で、学校の指導や取り組みへの総合的な満足度を学校段階別にみておこう。「かなり満足している」+「まあ満足している」の比率は、小学生の母親で82.1%なのに対し、中学生の母親では75.4%であり、総合的な満足度は、小学生の母親のほうが高い。

前述のように、さまざまな指導や取り組みへの満足度は、小学生の母親のほうが高い項目が多かったが、総合的な満足度においても、そうした結果が反映されていると考えられる。

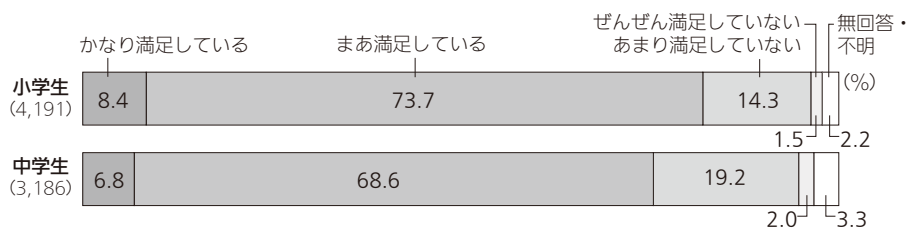
図6-2-3 学校の指導や取り組みへの満足度（学校段階別）



注1) 「かなり満足している」+「まあ満足している」の%。

注2) () 内はサンプル数。

図6-2-4 学校の指導や取り組みへの総合満足度（学校段階別）



注) () 内はサンプル数。

第3節 今年度の学校のようすや 新学習指導要領

新学習指導要領について、調査時点の2011年度においてすでに全面実施されている小学生の母親の認知率は6割、2012年度から全面実施される中学生の母親の認知率は3割である。

小学校では、2011年度から新学習指導要領が全面実施となった。一方、中学校では、一部の教科での先行実施はあるが、全面実施は2012年度からである。本節では、こうした状況下にある2011年度に、母親が学校の授業などのようすをどのようにとらえているかをたずねた結果を取り上げる。

具体的には、「今年度の学校の授業や宿題について、お子様自身はどのように感じていると思いますか」という質問文で、「学校の授業（内容や時数など）」「学校からの宿題（内容や量など）」について、母親からみた子どもの負担感をたずねた。

学校の授業や宿題が負担なのは、 小・中学生とも2割程度

図6-3-1は、学校の授業の負担感を学校段階別に示した結果である。「とても負担」+「やや負担」の比率は、小学生19.4%、中学生19.4%であり、母親からみた子どもの学校の授業の負担感には、学校段階による違いはみられなかった。「ちょうどいい」との回答はほぼ5割ずつである。

図6-3-2は、学校からの宿題の負担感を学校段階別に示した結果である。子どもが取り組む姿を直接目にするのも多いであろう、学校からの宿題については、母親は子どもの負担感をどのように認識しているのだろうか。「とても負担」+「やや負担」

の比率は、小学生19.9%、中学生21.3%であった。「ちょうどいい」は、小学生44.0%、中学生38.4%で、若干、小学生のほうが多いが、全体としてみれば、学校段階による違いはあまりみられなかった。

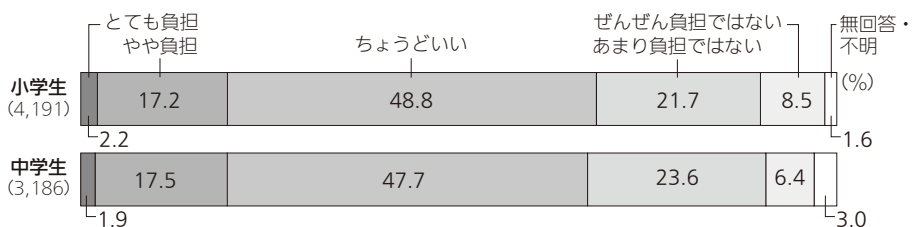
学校の授業や宿題の負担感は、 小2生が高い

では、学校の授業や学校からの宿題の負担感について、学年による違いはあるのだろうか。学校の授業の負担感について、「とても負担」+「やや負担」の比率を学年別に示したものが図6-3-3、学校からの宿題の負担感について学年別に示したものが図6-3-4である。

これらによると、小2生が学校の授業の負担感(24.8%)、学校からの宿題の負担感(27.2%)ともに、他の学年より高い。

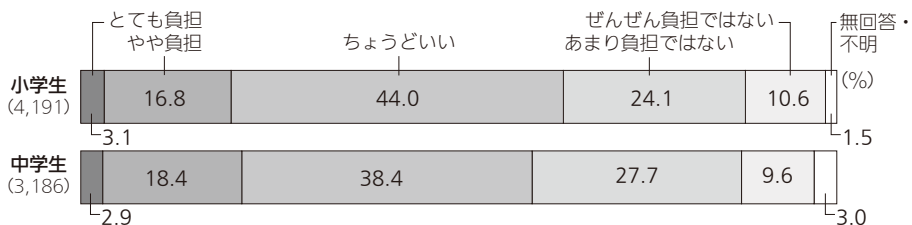
新学習指導要領の全面実施にともない、以前の学習指導要領下では上の学年で教えていた内容が、下の学年に降りてきた単元も存在している。たとえば小2生であれば、算数の「量の単位と測定」「時間の単位」「図形」といった単元においては、小3生から移行してきた内容が含まれている。こうした学習内容の変更が、負担感の背景にあるのかもしれない。あるいは、標準授業時数が増加していることも関係しているのかもしれない。本調査からだけでは、負担感の

図6-3-1 学校の授業の負担感（学校段階別）



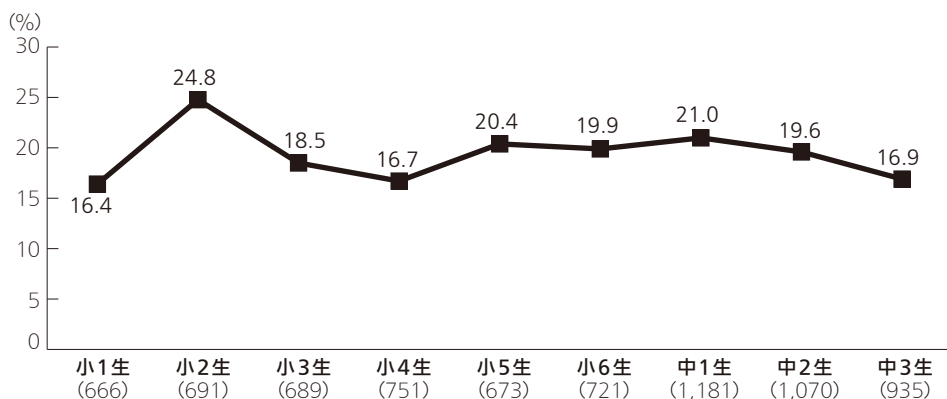
注) () 内はサンプル数。

図6-3-2 学校からの宿題の負担感（学校段階別）



注) () 内はサンプル数。

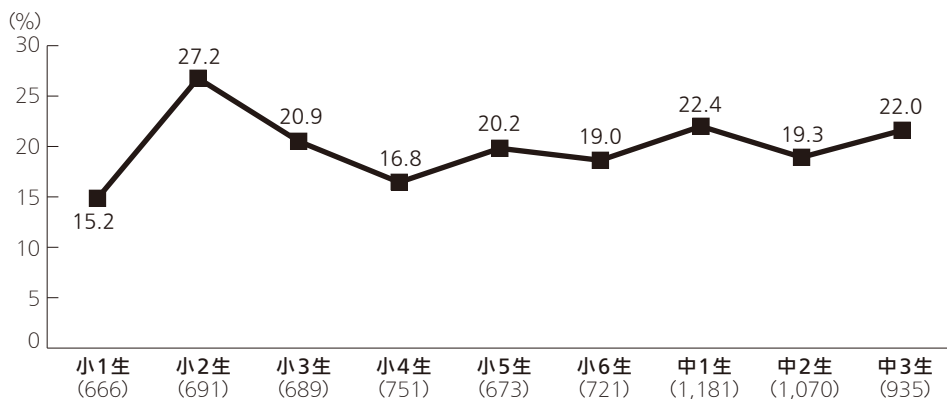
図6-3-3 学校の授業の負担感（学年別）



注1) 「とても負担」+「負担」の%。

注2) () 内はサンプル数。

図6-3-4 学校からの宿題の負担感（学年別）



注1) 「とても負担」+「負担」の%。

注2) () 内はサンプル数。

正確な原因を知ることは難しいが、さらなる検証が必要であろう。

小学生の母親の新学習指導要領の

認知率は6割

前述のとおり、小学校では、2011年度から新学習指導要領が全面実施となった。一方、中学校については、数学・理科で一部の内容の先行実施が行われているが、全面実施は2012年度からである。

新学習指導要領への移行にともない、授業時数や学習内容に変化が生じる。さらにそれらの具体的反映として教科書も変わる。文部科学省も保護者向けに情報発信を行っているし、各学校も保護者会や学校便りなどを通じて、周知を行っているということも耳にする。それでは、新学習指導要領について、保護者の認知率はどれくらいなのだろうか。

「今年度から小学校で新しい学習指導要領が全面実施されたことについて、どれくらい知っていますか」と、調査時点の2011年度における新学習指導要領の認知を小学生の母親にたずねた。図6-3-5によると、「よく知っている」+「まあ知っている」の比率は62.5%であった。すでに全面実施

に移されているということで、いろいろな場面を通して知る機会があることがうかがえる。

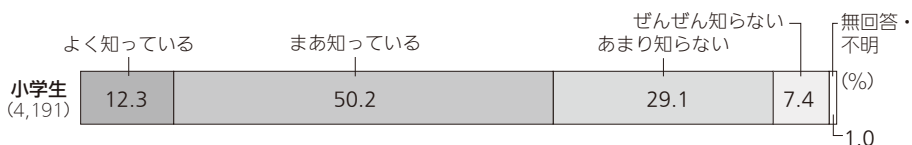
中学生の母親の新学習指導要領の

認知率は3割

次に「来年度から中学校で新しい学習指導要領が全面実施されることについて、どれくらい知っていますか」と、中学生の母親にたずねた。図6-3-6によると、「よく知っている」+「まあ知っている」の比率は28.3%であった。

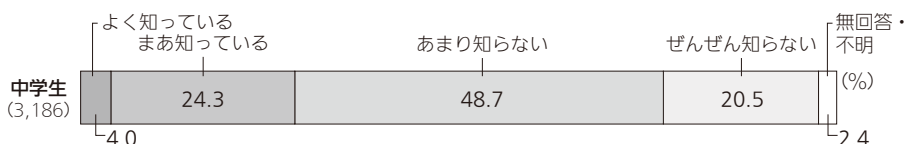
中学校では、数学・理科で先行実施中であるものの、全面実施前の段階での調査であり、中学生の母親においては、小学生の母親と比べ、その認知率は半数以下であった。実際、新学習指導要領のことを知るの、自分の子どもの授業時数が変化（増加）したり、教科書が変わったりしたことを目にしたときが一つの契機であろう。しかし、まだそのような時期ではない。また、学校からの周知がなされる機会も一つの大きな契機であろうが、これもまだ十分ではないのかもしれない。これが、調査を実施した2011年9月現在の状況と考えられる。

図6-3-5 新学習指導要領の認知（小学生）



注1) 小学生のみ回答。
注2) ()内はサンプル数。

図6-3-6 新学習指導要領の認知（中学生）



注1) 中学生のみ回答。
注2) ()内はサンプル数。